

宗教抗争のはざまで

——黒人問題の宗教的側面について（覚え書き）——

斎藤 忠利

1

聖書全体を貫く基本的なテーマのひとつが人間の解放——旧約では出エジプトの事実として記憶されるイスラエル民族の奴隷状態からの解放，新約では神学的な意味における人間存在の罪からの解放——であることを考えるとき，アメリカ黒人が奴隷としてアメリカ新大陸に運び込まれて押しつけられることになったキリスト教が，奴隷主の宗教，抑圧者の宗教であったことは，アメリカ黒人にとっても，アメリカのキリスト教にとっても不幸なことであった，と言わなければならない。

もっとも，聖書の中心的な舞台であるパレスチナとアフリカ大陸は陸続きであるから，イスラエル民族とアフリカの諸部族との接触は古くから行なわれていたはずで，聖書の中にエジプトもしくはエチオピアへの言及を探し求めることは容易である。その中で，アメリカの黒人奴隷制を聖書の立場から正当化するためにしばしば引き合いに出された，いわゆる「ハムの呪い」("Ham's curse")——父ノアの裸体を見て呪われ，他の兄弟たちの奴隷となることを運命づけられたハムを黒人種の先祖であった，とする俗説⁽¹⁾——は論外として，まず，エジプトに売りとばされたヨセフが，激しい飢饉に際してカナン〔パレスチナ〕の地から父ヤコブと兄弟たちを呼び寄せたという，よく知られるヨセフ物語が⁽²⁾思い出される。

このイスラエル民族のエジプト移住は，紀元前18世紀末または17世紀初頭のこととされるが⁽³⁾，「ここに，ヨセフのことを知らない新しい王が，エジプトに起った。彼はその民に言った，『見よ，イスラエルびとなるこの民は，われわれにとって，あまりにも多く，また強すぎる。さあ，われわれは，抜かりなく彼らを取り扱おう。彼らが多くなり，戦いの起るとき，敵に味方して，われわれと戦い，ついにこの国から逃げ去ることのないようにしよう』。そこでエジプトびとは彼らの上に監督をおき，

重い労役をもって彼らを苦しめた。」(出エジプト記1:8~11) こうしてエジプトで奴隷とされたイスラエル人たちが、モーセに導かれてエジプトを脱出し、主なる神の約束した「乳と蜜の流れる地」、カナンの地に攻め入った、いわゆる出エジプトの体験がイスラエル民族の信仰の基礎となったことは言うまでもない。

さらに時代が下ってイスラエルの王朝時代に入ると、ダビデ王の息子ソロモンがエジプトの王女を妻に迎えているが⁽⁴⁾、そのことはイスラエルの統一王国が通商その他の面で、エジプトと幅広い交流を行っていたことを裏書きする。その後、王国が分裂し、紀元前721年にイスラエル王国が滅んだのち、残ったユダ王国はアッシリアとエジプトの二大国の間でゆれ動き、エジプトに助けを求めようとして、預言者イザヤによって痛烈に批判されている。イザヤは主なる神の言葉として言う——「彼らはその頼みとしたエチオピアのゆえに、その誇としたエジプトのゆえに恐れ、かつ恥じる。その日には、この海べに住む民は言う、『見よ、われわれが頼みとした国、すなわちわれわれのがれて行って助けを求め、アッシリア王から救い出されようとした国はすでにこのとおりである。われわれはどうしてのがれることができようか』と。」(イザヤ書20:5~6) また、イザヤは、この批判に先立って「エチオピアの川々のかなたなる」国について言及し⁽⁵⁾、さらに「エジプトについての託宣」を下し、イスラエルが「エジプトとアッシリアと共に三つ相並び、全地のうちで祝福をうけるものとなる」日の訪れることを預言している⁽⁶⁾。

以上に列挙したものは、旧約聖書におけるエジプトもしくはエチオピアへの言及の数例であるが、エチオピアをもってアフリカの黒人種を代表させるとすれば、黒人種に対する救済の最高の約束の言葉として記憶されるものは、詩篇第68篇31節——「エチオピアには急いでその手を神に伸べさせてください」——である。つまり、アフリカの黒人種は旧約聖書において、主なる神の救いにあずかるべき者として明示的に言及されていたことになり、その預言はなによりも、主イエス・キリストの福音がアフリカ大陸に伝えられることによって成就されるはずであった。

そこで新約聖書に目を転ざると、ユダヤのベツレヘムに生まれた幼な子イエスが、ヘロデ王の追求の手を逃がれるために、ヨセフとマリヤに連れられてエジプトに下ったことを知らされる⁽⁷⁾。イエスは、ヘロデ王が死んで危険がなくなったのち、エジプトから帰ってくるのであるが、福音書記者のマタイは、イスラエル民族の出エジプトの出来事と重ね合わせて、これを預言者ホセアの言葉——「わたしはわが子をエジプトから呼び出した」(ホセア書11:1)——が成就したものである、とする。

つぎに、主イエスが十字架を背負ってゴルゴタの丘にむかう途中、たまたまそこを

通りかかったシモンというクレネ人が無理矢理に主イエスの十字架を背負わされる。このシモンが実は、黒人であった、という伝承がある⁽⁸⁾。その伝承は、シモンの出身地クレネが北アフリカのキレナイカ地方の首都であった関係から生まれた推測によるのかも知れない。しかし、このシモンがアンテオケ教会の主だった人々のひとり、シメオン（使徒行伝 13：1）と同一人物であったとすると⁽⁹⁾、シメオンは「ニゲル」（「顔色が黒い」の意）というラテン語名を持っていたことから、黒人であった可能性を全く否定し去ることはできない。ともあれ、あくまで伝承でしかないとは言え、黒人種の一人が主イエスの受難の苦しみにあずかった、という光栄を与えられてきたことは記憶されてよい。

最後に、使徒行伝第 8 章 26～40 節には、ピリポがエチオピア人の宦官に聖句を説き明かして主イエスのことを伝え、バプテスマを授けたという記事が見える。このピリポは、使徒たちの福音宣教の結果、弟子の数がふえて、十二使徒の助手をつとめる人たちが必要になったとき、信仰と聖霊とに満ちた人々として選ばれた七人のうちの一人で、サマリヤの町で宣教に従事していたが、主の使に命じられてエルサレムからガザへ下った。すると、エチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の財宝全部を管理していた宦官のエチオピア人が礼拝のためエルサレムに上り、その帰途についていたところに出くわした。このエチオピア人は馬車に乗っていて、預言者イザヤの書を読んでいて。ピリポは聖霊に促されて馬車に駆け寄り、請われるままに馬車に乗り込み、エチオピア人の読んでいたイザヤ書の一節を説き明かし、主イエスのことを宣べ伝えた。やがて水のある所に来るとエチオピア人はピリポに、バプテスマを授けてくれるようにと所望し、信仰を告白してピリポからバプテスマを受け、喜びながら帰国の旅を続けた、というのである。

このエチオピア人の宦官が今日のアビシニア〔エチオピア〕教会の創立者となったとする伝承⁽¹⁰⁾は、非学問的に過ぎるにせよ、紀元 4 世紀にツロの聖フルメンティウスとエデシウスによってエチオピアに伝えられたキリスト教がアビシニア〔エチオピア〕教会の母胎となったことは、まず間違いのないところであり⁽¹¹⁾、また、教会史家エウセビウスの伝えるところによれば、マルコによる福音書の記者マルコが初めてエジプトに渡って宣教活動を行ない、アレクサンドリアにいくつもの教会を設立して、今日のコプト教会の基礎を築いたとされる⁽¹²⁾。

ともあれ、北アフリカに伝えられたキリスト教は着実に発展し、周知のように、ラテン系アフリカ人の三大教父テルトゥリアヌス、キプリアヌス、アウグスティヌスを輩出するまでになるが、辛うじてその命運を保ったアビシニア〔エチオピア〕教会は

別として、北アフリカに成立したキリスト教会は、結局、土着化した教会ではなく、また、当時のキリスト教世界ではキリストの本性をめぐる神学論争の結果、分裂が始まっていたこともあって、イスラム教徒の進出の前には、ひとたまりもなかった。エジプトのコプト教会について言えば、紀元 616 年に一時的にペルシアの支配下に入ったのち、642 年にはアラブ人に征服され、コプト派のキリスト教徒がその信仰の自由を回復するのは、エジプトがイギリスに占領される 19 世紀末のことである。こうして、アフリカのイスラム化が進み、遂にはイスラム圏はアフリカの西海岸にまで達するのであるが、そのような過程のなかで、アフリカ黒人をイスラム教と結びつけて考える、という社会通念が、ヨーロッパのキリスト教世界に生まれていたとしても驚くには当たらない。

2

言うまでもなく、アメリカの黒人奴隷制の成立はアメリカ新大陸発見以後のことであるが、アフリカ黒人の奴隷化はそれ以前からすでにポルトガル人たちの手によって始められていた。イギリスのジャーナリストでアフリカ問題の権威と云ってよいバジル・デヴィッドソン (Basil Davidson) (1915-) は、黒人奴隷貿易の実態を実証的に描き出したその著『ブラック・マザー』〔のちに『アフリカ奴隷貿易』と改題〕 (*Black Mother [The African Slave Trade]*) (1961) の中で、スララ〔またはアスララ〕 (Zurara [Azurara]) の年代記に拠りながら、サハラ以南におけるヨーロッパ人とアフリカ人の最初の記録された小ぜり合いを紹介している。

それによると、コロンブスが大西洋を横断するちょうど半世紀前の 1441 年、ポルトガルからアントム・ゴンサルヴェスなる人物の指揮下に「一隻の小さな船」が出航した。ゴンサルヴェスと乗組員は今日のモロッコないしはスペイン領植民地リオ・デ・オロの南岸あたりまで乗り込んだが、そのときゴンサルヴェスは、この未知の南の国の住民を何人か生け捕りにして、主君であるポルトガル王室のエンリケ王子への土産物とすることを思いつき、黒いムーア人の男女をそれぞれ一名ずつ生け捕りにした。また、たまたま海岸にはもう一人のポルトガル人の冒険者がいて、二人はさらに共同で仕事をする事になり、沿岸の住民を襲撃し、十名の男女と少年、計十二名の捕虜をリスボンに連れ帰り、エンリケ王子に献上した⁽¹³⁾。

もちろん、このような他部族への襲撃や生け捕りといった現象は、人類の長い歴史の上で珍しいことではなく、奴隷制度そのものも人類の歴史と共に古いわけであるが、

たとえば未知の土地についての情報を手に入れるために、その土地の住民を生け捕りにすることから、一歩すすんで奴隷の商品化、つまり利潤の追求のために生け捕りが行なわれるようになったとき、そこに近代的な奴隷貿易の始まりを見ることができる。

当時のポルトガルには、すでにムーア人の奴隷が数多く存在したが、市場はまだ大きく、アフリカ沿岸からのムーア人の積荷が第二便、第三便と運ばれてくると、ムーア人の生け捕りが割に合う商売であると見られるようになり、数年のうちに奴隷狩りの遠征隊が派遣されるまでになった。しかしながら間もなくポルトガル人たちは襲撃よりも交易によるほうが奴隷を入手し易いことを学び、今日のモーリタニアのアルギム島を交易の場として毎年1,000人の奴隷をポルトガル本国に連れ去った。その50年後、交易がうまく行ったときには、3,500人以上の奴隷その他の商品が入手できるようになった、と推定され、「ヨーロッパのアフリカとの奴隷貿易は、その最初の50年間に、規模において3倍になっていた⁽¹⁴⁾。」

とは言え、奴隷貿易はアフリカとの交易の一部でしかなく、またポルトガルとスペインの奴隷に対する需要には限りがあり、さらに他のヨーロッパ諸国には需要は全く無かった。この時期のイギリスやフランスは奴隷貿易には全く関心を示さず、西アフリカへのイギリス人の最初の航海、1530年〔1528年?〕のウィリアム・ホーキンス(William Hawkins)(?—c. 1554)の航海は、象牙の積荷を持ち帰り、それに続く航海でも黄金と象牙と胡椒の取引が主たる目的であり、偶然に入手した5人の奴隷は、その後間もなく故国に送り返されている。

このような事態が続いていたのであれば、ポルトガルとスペインへの奴隷貿易は次第に規模も縮小し、やがては消滅していたかも知れなかった。ところが事態は、そのようにはならなかった。ポルトガル人が奴隷貿易を開始してわずか50年後、スペイン王室の援助を受けたコロンブスが西インド諸島を発見し、いわゆる「エンコミエンダ制」(“encomienda”)の名のもとにスペイン人の植民地経営が開始されるに及んで、「最初是一滴」(“At First a Trickle”)であった奴隷貿易の流れは、アメリカ新世界へと向きをかえ、「やがて洪水のごとく」(“And Then a Flood”), 19世紀の半ばまでの約400年間、アフリカ黒人を奴隷として運び続けることになるのである。

こうしたアフリカ奴隷貿易も、商取引きの一形態として、需要のあるところに供給が行なわれるという単純・明快な経済法則に基づいているが、売買できるものなら同じ人間までも商品化してしまうという、人間存在のおぞましさを示しており、この貿易の規模の大きさ——犠牲となったアフリカ黒人の数は、控え目に推定しても約5,000万人⁽¹⁵⁾、奴隷貿易に従事した多数の船舶はポルトガル、スペイン国籍、のちにイギ

リス、フランス、オランダ、プロシヤ、デンマーク、スウェーデン、ブラジル、アメリカ国籍と、多岐に亙る——には、我々の想像を絶するものがあり、これをもって人類の人類に対する最大の犯罪のひとつであった、と言っても過言ではない。

さらに、黒人奴隷貿易がイギリスの基幹産業を刺激し、正に産業革命そのものを支えたものであることは、エリック・ウィリアムズの『資本主義と奴隷制』(Eric Williams, *Capitalism and Slavery*) (1944) が実証的に明らかにしているところであり、また、C. L. R. ジェームズの『黒いジャコバンたち』(C. L. R. James, *The Black Jacobins*) (1938, '63) によれば、フランスのサン・ドミンゴ〔ハイチ〕植民地経営がフランス革命の主要な担い手たるブルジョア階級を育てるのに一役買ったとされ、そのような意味でアフリカ奴隷貿易は世界の歴史の動きに深くかかわっていた、と見ることができる。

しかしながら、ここで忘れられてはならないのは、これほどに規模の大きい黒人奴隷貿易、人類の人類に対する最大の犯罪のひとつが、キリスト教世界の出来事として、キリスト教の是認もしくは黙認のもとで行なわれた、という事実である。前述したように、ポルトガル人のゴンサルヴェスが十二名の黒いムーア人の男女をエンリケ王子に献上したとき、エンリケ王子はこれを大いに喜び、時のローマ教皇に特別使節を送り、それ以後のアフリカ人襲撃や征服の計画について説明させた。ローマ教皇はそれを聞いて、この新しい十字軍を歓迎し、「件の戦に従事することになるすべての人々に、その凡ゆる罪の完全な赦し」を賜わった、と言われる⁽¹⁶⁾。つまり、ポルトガル人たちの手によって始められたアフリカ奴隷貿易は、その最初から法王庁のお墨つきであったことになり、それ以後のアフリカ奴隷貿易の規模の拡大の経緯に照らして、キリスト教が、カトリックとプロテスタントの別なく、この貿易に深くかかわった責めを負わなければならないことは明らかである。

エリック・ウィリアムズは書いている——

教会もまた、奴隷貿易を支持した。スペイン人たちは、その貿易に異教徒を改宗させる好機を見てとって、イエズス会士、ドミニコ会士、フランシスコ会士たちは、甘蔗栽培、とりも直さず奴隷所有に深くかかわることになった。ニューポートの教会のひとりの年とった長老の話が伝えられているが、この長老は、海岸から奴隷商人がやってくると、その次の日曜日にはきまって、「福音伝播の恩恵を受けられる地に、未開の人間たちの船荷がまた運ばれてきたこと」を神に感謝したものだ。……教会は、唯々諾々と従うだけだった。福音普及協会は、バルバドス島に所

有する奴隷たちにキリスト教を教えることを禁止し、新しく入手した奴隷たちに「協会」と書いた焼印を押し、一般人所有の奴隷たちから区別した。……………多くの宣教師たちは、ベルゼブルをもってベルゼブルを追い出す〔毒をもって毒を制する、ほどの意〕ことをよしとした。奴隷貿易に関して書かれた最新のイギリス人の著述〔原注：A. Mackenzie-Grieve, *The Last Years of the English Slave Trade* (1941)〕によれば、彼らは「黒人奴隷の虐待を改めさせるには、自らが奴隷と地所を所有し、このような実際的な方法でプランターたちの魂を救い、その抛って立つところを向上させることにより、プランテーション所有主たちに良い模範を示すのが最良の策だ」と考えた。西インド諸島のモラヴィア派の宣教師たちは、躊躇せずに奴隷を所有したし、ある歴史家〔原注：G. R. Wynne〕が見事なまでの心遣いをもって書いているが、バプテスト派はその初期の宣教師たちに奴隷所有を非難することを許そうとしなかった。エクセターの主教は最後の最後まで、自分の所有する655人の奴隷を手放そうとせず、1833年に手放したときは12,700ポンド以上の補償金を受け取った。

……

……

クエーカー教徒の非国教主義も奴隷貿易にまでは及ばなかった。1756年、アフリカと交易している会社の社員として84人のクエーカー教徒の名が列挙されており、その中にはパークレー家とベアリング家の名も含まれていた。奴隷の取引きは、アメリカのクエーカー教徒たち同様、イギリスのクエーカー教徒の最も儲かる投資のひとつであり、1793年、ボストンからシエラ・レオネに入港したと報じられた奴隷船の船名「意欲的なクエーカー」(*The Willing Quaker*)は、奴隷貿易がクエーカー教徒の仲間内で承認されていたことを象徴的に示している。奴隷貿易に対するクエーカー教徒の反対の声は、先ず専ら、イギリスからではなくアメリカから起こり、それもアメリカの、奴隷労働とは無関係な北部の小農村共同体から起こったのである⁽¹⁷⁾。

ところで、スペイン人たちがエスパニョーラ島その他の西インド諸島の島々で征服と開発を始めたとき、先ず原住民のインディオを奴隷化して、鉱山や農耕のための労働力として使用したことはよく知られている。それは、1503年の末、スペイン国王がインディオのキリスト教化の義務と引きかえに、労働力として一定数のインディオを使役する許可を与えた「エンコミエンダ制」に基づくものであるが、結局、エンコ

ミエンダ制は奴隷制に他ならず、インディオの奴隷化がインディオをキリスト教化させるためという名目上の理由で正当化されただけのことであった。しかしながら、この制度によって聖職者たちも布教に従事する傍ら、インディオの奴隷を使って自ら農耕や鉱山の経営にあたった。

後述するように、インディオに代わる労働力として黒人奴隷の導入を勧告したバルトロメー・デ・ラス・カサス (Bartolomé de Las Casas) (1474-1566) もそのような聖職者のひとりで、1498年に下級聖職位を受けたのち、1502年、ニコラス・デ・オバンドのエスパニョーラ島遠征に参加し、インディオへの布教に従事。1507年にローマで司祭に叙せられ、エスパニョーラ島に戻り、1513年にはディエゴ・ペラスケスのキューバ島征服に従軍司祭として同行したことが認められて、キューバ島にエンコミエンダを与えられ、布教に従事しながら農耕と鉱山の経営に専念している⁽¹⁸⁾。

このラス・カサスについて特筆すべきことは、酷使されて次々に死んでいくインディオの惨状を目のあたりに見て、エンコミエンダ制の撤廃こそがインディオを救う道であるという認識に達し、1514年には自分の所有するインディオを解放したのち、インディオの救済のために尽力していることである。ラス・カサスは、インディオの実情を報告するためにスペイン植民地とスペイン本国の間を何度も往復し、また、1531年にはエンコミエンダ制と征服戦争の不正を訴える書簡をインディアス枢機会議に送り、さらに1542年にはインディアスにおけるスペイン人の非道な所業を暴く報告書をスペイン国王に提出したが、その報告書を印刷したものが『インディアスの破壊についての簡潔な報告』(*Brevisima relación de la destrucción de las Indias*) (1552)である。

なお、ラス・カサスは、バリャドリでインディオの奴隷化の是非をめぐって、フワン・ヒネス・デ・セブルベダと大論戦を展開したが、アリストテレスの先天的奴隷人説⁽¹⁹⁾に拠ってインディオの奴隷化を是とするセブルベダをむこうに回してラス・カサスは、聖書、教会法、ローマ法、アウグスティヌスやトマス・アキナスなどの理論を援用して書き上げた『新世界の住民を弁ずる書』(*Adversus persecutores et calumniatores gentium novi ad oceanum reperti apologia*)を朗読して反論し、堂々の論陣を張った。〔因みに、この大論戦に関しては、Lewis Hanke, *Aristotle and the American Indians: A Study in Race Prejudice in the Modern World* (1959)に詳しい紹介がある。〕

ところが、インディオを絶滅の危機から救うためにその後半生を捧げたラス・カサスにとって、痛恨の極みと言うべきは、のちにラス・カサス自身がその誤ちに気付い

て撤回したとは言え、1516年に〔1518年頃、とも言われる〕インディオに代わる労働力として黒人奴隷の導入を勧告したことである。もちろん、すでに述べたように、ヨーロッパでは黒人奴隷貿易は始まっていたし、コロンブスの大西洋横断の試みが企てられる以前から黒人奴隷制はアンダルシア地方で成立し、セビリアの町では黒人奴隷の数も多かったから⁽²⁰⁾、必ずしもエスパニョーラ島への黒人奴隷の導入を最初に提案したのがラス・カサスであったとは言えない。スペイン本国で黒人奴隷を所有していたスペイン人は、最初は黒人奴隷が輸出禁制品であったにせよ、キリスト教徒の間で生まれて奴隷化された黒人の持ち出しが勅令で認められるようになってからは、エスパニョーラ島へ黒人奴隷を同行させた⁽²¹⁾。

奇妙なことにバジル・デヴィッドソンは、この有名なラス・カサスの勧告には全く言及していないが、次のように述べている――

黒人奴隷の貿易は早くも1510年には重要なものになっていた。それ以前には、労働力の需要がとくに切実になるたびに散発的な積み出しがあった。エスパニョーラ島のオバンドは間もなく、黒人貿易の抑制についてその考えを変えざるを得なくなっていて、すでに1505年、コロンブスが大西洋を横断して13年後には、スペインの公文書保管所の記録によると、17名の黒人奴隷と若干の鋳山設備を積んだ帆船^{キヤラヴエル}がセビリアから出航している。間もなくオバンドは、さらに多くの黒人労働者を求めている。そして1510年には、大量かつ特殊な形でのアフリカ奴隷貿易の開始が訪れた。インディアスで売るために最初は50名、つぎには200名の奴隷を輸送してよいとする勅令が与えられた。これに続く数年間のうちに、その犠牲者を、隷属状態にも拘らず配慮はされてよいとされた召使いや屋内奴隷としてではなく、動産奴隷すなわち勝手気ままに売ってもよいし、売るのが当然である商品として考えることが、この貿易の焼印となることになった⁽²²⁾。

従って、アメリカ新世界への黒人奴隷導入の責めをカトリックの司祭、インディオの「保護者」ラス・カサスひとりに負わせることは正当ではないが、インディオの奴隷化同様にアフリカ黒人の奴隷化も正義の法に悖ることに気付いて、黒人奴隷導入の勧告を撤回したのちも、ラス・カサスが黒人の奴隷化を公然と非難したり、黒人奴隷の解放を唱えたりした形跡はなく、1544年頃になっても黒人奴隷を所有していたらしいことから⁽²³⁾、ラス・カサスがとりわけ、アメリカ黒人たちから激しい呪詛の言葉を浴びせられることになったのは当然至極である。

とにかく、このようにして始まった黒人奴隷貿易は、西インド諸島では砂糖が、ア

メロカ大陸ではタバコと綿花がプランテーションで生産されるようになるに及んで、その規模を拡大し、黒人奴隷制が確立する。「黒人奴隷制の起源は、カリブ海諸島では砂糖、大陸においてはタバコと綿花という三語で言い表わすことができる。経済構造の変化は、それに応じた労働力供給上の変化を生み出す。基本的な事実は、『搾取関係の社会的、経済的下部構造の創出』である。砂糖、タバコそして綿花は、大プランテーションと大量の低廉な労働力を必要とした。もと年期奉公人の白人の小農場は、どうにも存続できなくなった。バルバドスの小農場のタバコは、大プランテーションの砂糖にとって代わられた。カリブ海諸島における砂糖業の勃興は、小農場主の大々的な没落の合図であった。バルバドスには1645年に、11,200人の白人の小農および、5,680人の黒人奴隷がいた。それが1667年には、745人の大プランテーション所有主と82,023人の奴隷が存在するようになっていた⁽²⁴⁾。」人類が砂糖の味を楽しむようになったとき、その砂糖は黒人奴隷たちの苦役によって作り出されていたのであって、砂糖の甘さには黒人奴隷たちの血のまじった汗の苦さがまじっていたはずである。エリック・ウィリアムズは続けて言う――

黒人奴隷制はカリブ海諸島の全域にわたる社会構造を黒一色にしたが、その間、黒人奴隷の血は大西洋とその両岸を赤く染めた。砂糖のようにかくも甘く、人間の生存にとって必要な物品が、これほどの犯罪と流血をひき起こすことになったとは、なんとも奇妙!⁽²⁵⁾

さて、ポルトガル人の手によって始められ、スペイン人の手に移された黒人奴隷貿易は、やがてイギリス人の手に継承されて、アメリカ大陸に成立したイギリス植民地に黒人奴隷制が根付くことになる。その植民地が1776年にイギリス本国からの独立を宣言したとき、獲得された自由は黒人奴隷たちには及ばなかった。「自由の国」アメリカは「不自由〔強制〕労働」を基礎とする黒人奴隷制をかかえたまま、矛盾のうちに建国されたことになり、さらにその時点で黒人奴隷貿易を直ちに中止することもできなかった。アメリカ憲法、第一条、第九節、一項には、「現在の各州中の一つが入国を適当と認める人々の来住および輸入につき、連邦議会は1808年以前においてこれを禁止することはできない。しかし、その輸入に対しては一人に対し十ドルを超えない租税もしくは入国税を課することができる」とあるが、要するに一種の時限立法として、一人につき十ドルの税金を払いさえすれば、1808年までは、誰でも合法的に黒人奴隷を輸入してよい、ということであり、また、1808年以後も黒人奴隷の密輸入が行なわれた可能性は否定できない。

一般的にアメリカの独立戦争は「アメリカ革命」(“the American Revolution”)と呼ばれるが、アメリカ建国が一種の革命であったとして、その革命が未解決のままに残した矛盾、黒人奴隷制の解決のためにはアメリカは第二の革命、すなわち南北戦争を必要とした。この南北戦争に先立って、19世紀のアメリカでは1830年代あたりから奴隷制反対運動の気運の高まりが見られる。その気運をいやが上にも高めるのに役立ったものとして記憶されるのは、デイヴィッド・ウォーカー (David Walker) (1785-1830) の『ウォーカーの訴え』(*Walker's Appeal*) と題するパンフレット (1829) である。このパンフレットは、恐らく南北戦争以前にアメリカ黒人の手によって書かれた最も激烈な奴隷制批判の文書であろうが、その中でウォーカーは、アメリカ新世界への黒人奴隷導入を提案して、黒人奴隷制成立の道を開いたラス・カサスを手きびしく非難して、次のように言っている――

キリスト教世界にはよく知られていることであるが、かの名だたる食欲家のカトリック司祭もしくは説教者、コロンブスの第二回航海に同行した冒険者バーソロミュー〔バルトロメー〕・ラス・カサスは、エスパニョーラ島の同国人たるスペイン人たちに、金や銀を掘らせ、そのプランテーションを耕させるためにアフリカのポルトガル植民地から黒人を輸入してはどうか、と提案した。そしてその提案を実行に移すためにラス・カサスはエスパニョーラ島からスペインに船でもどり、その当時、健康が衰え出していた主君のファーディナンド〔フェルナンド〕にこの提案を開陳した。

ファーディナンドはその提案に耳を傾けたが、その後、間もなく死亡し、その計画は後継者チャールズ〔カール〕五世の手に引き継がれた。――この卑劣漢(「説教者、ラス・カサス」)はその抑圧の計画に見事に成功して、1503年、最初の黒人が新世界に輸入されたのであった。この成功に有頂天となり、あさましい食欲のみに駆られてラス・カサスは、1511年、フランダースの一商人が一度に4,000人の黒人を輸入する許可を賜わるよう、チャールズ五世に懇願した。かくして、我々共通の主であるイエス・キリストの福音の似非説教者の手によって我々黒人の悲惨がアメリカで始まった――そして、その悲惨が1503年から1829年の今日まで続いているのだ。実に326年の期間。だが、1620年〔正しくは、1619年〕――我々の先祖の20名がオランダの軍艦でヴァージニア州のジェームズタウンに持ち込まれて、まるで獣のように最高の入札者どもに売りとばされてからは、209年。さらに、圧制者どもが我々の悲惨な状態を万物の終わりの時まで、自分たちとその子孫の支配

下に永続させようと望んでいることに、わたしはなんの疑いをも持たない。しかし、その压制者どもが大きな思い違いをしているのではないのなら、それは神に忘れ去られてしまっているからであろう⁽²⁶⁾。

たしかにラス・カサスは新世界におけるスペイン人たちの征服を、被征服者の立場に立って捉え直すことのできた人ではあった。しかし、それにも拘らず我々が驚かされるのは、インディオに代わって奴隷化された黒人たちに対するラス・カサスの信じ難いほどの冷淡さである。ラス・カサスの黒人奴隷導入の勧告にしても、自らエンコミエンダの経営にあたったラス・カサスが、アフリカ黒人の体力のみがエスパーニャ島の灼熱の太陽のもとでの苦役に耐え得るものであることをその目で見た、実際的な体験が教えたという解釈が成り立たぬでもない。しかしながら、黒人奴隷に対するラス・カサスの異常なまでの冷淡さは、イスラム化したムーア人と同一視されるようになったアフリカ黒人に対するラス・カサスの、そして当時のスペイン人一般の抜き難い憎悪の念によってしか説明し得ないのではないか。

アメリカの歴史家ジョージ・バンクcroft (George Bancroft) (1800-1891) は夙に、黒人奴隷制の成立を西ヨーロッパにおける700年以上に及ぶキリスト教とイスラム教の対峙・抗争という文脈の中で捉え、キリスト教徒がイスラム教徒を捕えて奴隷化し、イスラム教徒がキリスト教徒を捕えて奴隷化した、その相互奴隷化の延長線上に生じた出来事であった、としている⁽²⁷⁾。また、1967年にピューリッツァー賞を受賞した『西欧文化における奴隷制の問題』*The Problem of Slavery in Western Culture* (1966)の著者デイヴィッド・ブライオン・デイヴィス (David Brion Davis) は、同書の中で、インディオとアフリカ黒人に対するラス・カサスの対応に見られる矛盾を指摘したあと、次のように書いている――

スペイン政府とポルトガル政府のくるくる変わる政策にも、インディオと黒人に関する似たような二重の基準が露呈されているが、それは部分的にはアフリカ黒人をムーアと結びつけて考え、かくしてアフリカ黒人を脅威的な不信仰者とする伝統的な傾向に由来した⁽²⁸⁾。〔傍点は筆者〕

周知のように西ヨーロッパ世界が大航海時代の幕開けを迎えたとき、イベリア半島ではスペイン人の国土回復の悲願、「レコンキスタ」(“la Reconquista”) (A. D. 711-1492) がその大詰を迎えようとしていた。奇しくもコロンブスとその第一回目の航海でサン・サルバドール〔グァナハニ〕島に到達した年の前年〔1491年〕、イスラム

教徒の最後の拠点グラナダは、カトリック両王フェルナンドとイサベルの軍門に降り、翌年1月にイスラム王朝最後の国王ボアブディルはアルアンブラ城を明け渡した。両者の間の交渉でまとめられた降伏条項はイスラム教徒にとってかなり寛大なものであったと言われるが、1500年にはグラナダ一帯にイスラム教徒の暴動が発生し、1502年の2月、イスラム教徒の追放令が發布されて、300万人とも言われるムーア人たちがイベリア半島を追われ、やむを得ず留まり、キリスト教への改宗を拒否した者や、両親と共に出国することを禁じられた子供たちはキリスト教徒の奴隷とされた⁽²⁹⁾。

つまり、キリスト教徒によるイスラム教徒の奴隷化は、多年にわたるイスラム教徒のイベリア支配に対するスペイン人たちの報復行為に他ならず、アフリカ大陸のイスラム化が進行する中で、イスラム支配に対するスペイン人の憎悪がアフリカ黒人全体に向けられるようになったことは想像に難くないところであり、新世界に進出したスペイン人たちが、いわば不倶戴天の敵ムーア人と同一視されるようになったアフリカ黒人を奴隷化することに、いささかの良心の呵責も感ずることがなかったとしても無理はない。

しかしながら、聖書の世界に通暁しているはずのカトリックの司祭ラス・カサスや同時代のスペインの聖職者たちが、この小論の第一部で紹介したようなアフリカ黒人に対する主なる神の経綸を故意にか、あるいは偶然にか全く顧慮していないことに我我は、ただただ呆れ返るほかはなく、第一義的には経済問題の現象とされる黒人奴隷制の成立が、宗教抗争のはざままでキリスト教世界が聖書を忘れて犯すことになった最大の犯罪のひとつでもあることが明らかになるのである。

3

一見、話がとぶようであるが、この小論の結びとして、1960年代のアメリカのいわゆる「ブラック・パワー」(“Black Power”)の高まりの中でその存在が注目されるようになった「ブラック・ムスリムズ」(“the Black Muslims”)の運動について言及しておきたい。この運動については未だに謎とされている部分が多いが、そもそもこの運動の創始者とされる人物にしてからが殆どその素性がわからず、1930年の真夏、デトロイトの黒人地区に忽然と姿を現わした⁽³⁰⁾。この人物は愛想のよい行商人で、アラブ人と考えられていたらしいが、デトロイトの黒人たちの家々に喜び迎えられて、請われるままに外国暮らしの経験などについて話しているうちに、聖書をテキストに使ってキリスト教ではなく、アジアやアフリカの黒人たちの宗教について教

えるようになった。つまり、聖書が『コーラン』への導入教材として用いられた。

やがて「ファラッド・モハマッド」(Farrad Mohammad), 「F・モハマッド・アリ」(F. Mohammad Ali), 「W・D・ファード」(W. D. Fard) とも自称するこの人物の教えは、白人種に対する激しい呪詛となり、それを聞いた黒人たちは一種の宗教的カタルシスをおぼえて、その教えに帰依し、信徒となり、集会所は「イスラムの寺院」(“Temple of Islam”) と呼ばれるようになった。これが「ブラック・マズリムズ」の誕生の由来である。

こうして始まったこの運動のごく初期から役員をつとめた人のひとりがエライジャ・ムハマッド〔本来の姓はプール〕(Elijah Muhammad [Poole]) (1897-1975)で、1934年の6月頃、出現したときと同様、忽然と教祖が姿を消したあと、衣鉢を継いだエライジャ・ムハマッドはアメリカ黒人の間に、街頭での勧誘、文書伝道、ラジオ放送などを通じて、大衆運動としてのブラック・マズリムズを盛り上げ、1960年の時点でアメリカ全土に69の寺院と会員数10万人を擁する組織にまで発展させた。その後、エライジャ・ムハマッドの片腕と見られていたマルカム・X (Malcolm X) (1925-1965) がムハマッドと対立し、1965年の2月に暗殺され、ムハマッドも1975年に死亡すると、この運動は四分五裂となった⁽³¹⁾。

なお、1960年代に「ブラック・パワー」のスポークスマンのひとりに擬せられた観のあるアメリカの黒人作家ジェイムズ・ボールドウィン (James Baldwin) (1924-

) は、1961年の夏、シカゴでエライジャ・ムハマッドから食事に招かれ、そのときの会見の様をエッセイ集『次は火だ』(*The Fire Next Time*) (1963) の中で書いている。ボールドウィンは、聖書の神が結局は「白い」神であったのではないか、という深刻な疑念を捨てきれずにキリスト教に入信した人であるだけに、「白い」神に見捨てられたままになっている黒人種を救い得るのは「黒い」神アラーを措いて他にないとするブラック・マズリムズの主張に、なにがしかの共感を示し、その激しい白人憎悪にはナチズムを思わせる危険性を感じながらも、「わたしは彼〔エライジャ・ムハマッド〕に強い親近感をおぼえた。そして実際、彼を証人として、盟友として、父親として愛し、敬うことができたなら、と思った」と言っている⁽³²⁾。

ブラック・マズリムズがその究極的な目標としたところは、アメリカ国内に黒人だけの国家を樹立することにある、とされたが、そのような目標が非現実的であるにせよ、キリスト教を抑圧的な白人種の宗教として断固、拒否し、白人種を白い悪魔と呼び、白人支配は1913年もしくは1914年に終わったと宣言して憚らなかつたその戦闘性には侮り難いものがあると感じたアメリカ人は、少なくなかつたと思われる。

宗教組織としてのブラック・マズリムズは、正統的なイスラム教の立場からは異端的な教派ということになろうが、アメリカ黒人の心情に強く訴えるものを持っていた点から言えば、アメリカの歴史の中で形を変えて繰り返し登場してくる黒い民族主義の波のひとつと見ることができる⁽³³⁾。そして、その激しい白人憎悪と人種主義は、白人優位の原則をふりかざす狂信的な白人たちの黒人蔑視と人種主義をそっくり裏返したものであることも注目されてよい。

このようなブラック・マズリムズを無知なアメリカ黒人たちの間に生じた一過性の病的な現象として片付けることも、あるいは可能かも知れない。しかしながら、押しつけられたキリスト教を自らの宗教として捉え直したアメリカ黒人が存在するその一方で、キリスト教に絶望し、愛想をつかして、アラーの神を黒人種の神として選ぼうとする人々のあることは、黒人奴隷制の成立に手を貸し、数百年に亘る黒人差別のイデオログになり果てた「白い」キリスト教に深刻な反省と徹底的な悔い改めを迫るものではなからうか。

注

1. 「創世紀」9：20-27 参照。
2. 「創世紀」37-50 章参照。
3. E. エールリッヒ（馬場嘉一，恵二訳）『イスラエル史』（1962）p. 13.
4. 「列王紀上」3：1 参照。
5. 「イザヤ書」18 章参照。
6. 「イザヤ書」19 章参照。
7. 「マタイによる福音書」2：14-15 参照。
8. この伝承を前提にして、それを否定する形で書かれている以下の記述を参照。「彼〔クレネ人シモン〕が黒人であった可能性はない。北アフリカのキレナイカ地方の首都クレネには多くのユダヤ人が住んでおり、シモンは恐らくこの時、パレスチナの田舎に住んでいて、過越の祭のためにエルサレムに上京していたのであろう。」（*The Interpreter's Dictionary of the Bible*, Vol. 4, p. 357.）
9. Cf. I. Howard Marshall, *The Acts of the Apostles* (1980), p. 214.
10. Cf. Edward W. Blyden, *Christianity, Islam and the Negro Race* (1887), p. 164.
11. Cf. F. L. Cross (ed.), *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, pp. 474-475.
12. Cf. Eusebius, *The History of the Church* ii. 16 [Penguin Classics (1965), p. 89] & *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, pp. 345-346.
13. Cf. Basil Davidson, *Black Mother [The African Slave Trade]* (1961), pp. 33-35.
14. *Ibid.*, p. 40. なお、以下の記述は同書に負うところが多い。
15. *Ibid.*, pp. 80-81.

16. Cf. *Ibid.*, pp. 35-36.
17. Eric Williams, *Capitalism & Slavery* (1944), pp. 42-43.
18. ラス・カサス (染田秀藤訳) 『インディアスの破壊についての簡潔な報告』(岩波文庫) (1961) 巻末の「ラス・カサス年譜」による。なお、以下の記述は同書の解説に負うところが多い。
19. アリストテレス (山本光雄訳) 『政治学』(岩波文庫) (1961), pp. 40-43 参照。
20. Cf. George Bancroft, *History of the Colonization of the United States* (1846), Vol. 1, p. 167.
21. Cf. *Ibid.*, p. 169.
22. Basil Davidson, *Black Mother [The African Slave Trade]* (1961) p. 46.
23. Cf. David Brion Davis, *The Problem of Slavery in Western Culture* (Pelican Books) (1970), pp. 191-192.
24. Eric Williams, *Capitalism & Slavery* (1944), p. 23.
25. *Ibid.*, p. 27.
26. David Walker, *Walker's Appeal, in Four Articles, together with a Preamble, to the Colored Citizens of the World, but in particular, and very expressly to those of the United States of America* (Arno Press) (1969), pp. 47-48.
27. Cf. George Bancroft, *History of the Colonization of the United States* (1846), Vol. 1, pp. 163-164.
28. David Orion Davis, *The Problem of Slavery in Western Culture* (Pelican Books) (1970), p. 192.
29. 飯塚一郎『大航海時代のイペリア』(1981), pp. 79-126 参照。
30. Cf. C. Eric Lincoln, *The Black Muslims in America* (1961), p. 10. なお、以下の記述は同書に負うところが多い。
31. Cf. Wilson Jeremiah Moses, *Black Messiahs & Uncle Toms* (1982), p. ix & pp. 183-195. なお、同書によると、Elijah Muhammad の死後、“the Black Muslimism” は息子の Wallace Muhammad の手に引き継がれ、その名称を “the World Community of Al-Islam in the West” と改め、かつての民族主義的な戦闘性を失なって、一種の企業体と化し、その存在理由が無くなった、と見られている。(Cf. pp. 187-188.)
32. Cf. James Baldwin, *The Fire Next Time* (1963), pp. 71-96.
33. 「ブラック・マズリムズ」に先立つ黒い民族主義の運動としては、1920年代に「アフリカに帰れ」と唱えたマーカス・ガーヴェイ (Marcus Garvey) (1887-1940) の UNIA [Universal Negro Improvement Association] が思い出される。